

---

# IS CREED

グリペン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I S C R E E D

### 【Nコード】

N 4 5 0 4 Y

### 【作者名】

グリペン

### 【あらすじ】

古から続くアサシンとテンプル騎士団による世界の裏側での闘い……。人類を支配しようとする目論むテンプル騎士団の強大な力は、ISが普及した現代においても衰える事はなく、着々と世界を手にする準備を整えていた……。そんな中、そんな野望を阻止すべく暗躍する一人の少年がいた。白い装束を纏い、フードからのぞく鷹の目で彼は何を見るのか……？女尊男非となったこの世界で、彼は自分の使命を果たすために奮闘する。全ては世界の安全と平和のために……。真理は存在せず、許されぬ行為もない…… 小説を書くの

は初めてですが、よろしくお願いします。

## プロローグ

インフィニット・ストラトス……通称”IS”。それは世界を震撼させるほどの性能を持っていた。

いかなる環境にも耐えうる、宇宙進出用のマルチフォーム・スーツとしてそれは製作されたはずだった……。

だがそれとは裏腹に、世界はこれらを兵器として使用した。既存の兵器をも上回る攻撃力と機動性……、操縦者の生存率を飛躍的に上昇させる絶対防御……、そして過去に起こったある事件……。それらはISを兵器として転用するには十分すぎる説得力を持っていた。

これだけ聞けば、ほとんどの人間はこの”力”を手に入れたいと思うだろう。

しかしこの兵器にもいくつか弱点はある。

何故か女性にしか扱えず、そしてISの心臓部であるコアが467個しかないのである。

そして皮肉にもこの弱点がこれまでの社会の在り方を崩壊させ、数の限られたISに乗れる女性が偉いという歪んだ女尊男非という世界を作り上げたのだった……。

これをISの製作者である篠ノ之束が意図したものでどうかは分からない。だがその答えを聞くころにも、彼女はある日を境に謎の失踪を遂げてしまった。そして現時点でISのコアの製作法を知っているのは彼女だけである。

つまりコアがこれ以上増えることはありえない。

そこで世界はアラスカ条約を締結してコアを各国で分配、保有することで軍事バランスを保つことにした。

つまりはISを複数保有し、なおかつ性能の良いものができれば、あらゆる面で他国より優位に立てるといふ事を意味する。

これは表の世界の話である。いかにISを複数所持していようと、いかに性能の良いISを開発したとしても、それらが世界を制するための手段になりえない。何故ならばそれは単なる武力行使のための”力”でしかないのだから……。

だが仮に世界を手に入れるほどの絶対的な”力”が存在すればどうだろう……？

その”力”が人々の心をも魅了し、支配できるほどの物とすれば……。  
そしてそれが今あなたの目の前にあるとすれば……どうするだろうか？

悪用されないように破壊する？それとも自分の欲望を満たすために使用する？

それは私にも分からない。答えをだすのはあなた自身なのだから……。

だがひとつ言えるのは、絶対的な”力”を持つこの秘宝”エデンの果实”をもってすれば、ISという兵器など無きに等しく、女尊男非などという世界など容易に壊せるということだ。

表で騒がれているISなど比較にならないほどの価値が、その秘

宝には詰まっているのだ……。

もうひとつだけ言えることがある。それはこの秘宝をめぐる、はるか昔から闘いが続いているということだ。

世界の裏側では、人々を支配することで新世界を築こうとする勢力が存在していた。

彼らはその野望を成就せんと、多くの人々を苦しめ、騙し、陥れてきた。逆らうものは容赦なく殺してだ。

だがそれを阻止するための勢力も存在していた。私利私欲にまみれた人間を断罪し、人々の畏怖と敬意の狭間で生きた彼ら……。そんな彼らはアサシンと呼ばれ、影に潜んで悪を討つまさに暗殺者たる集団だった。

彼らが求めるものは只ひとつ、人々の安全と平和である。そのために彼らは戦い、その数を減らしながらも野望を阻止していった。

その戦いはかつて十字軍とイスラム軍が聖地をめぐる争っている間や、その数百年後のルネサンスの真つ只中にも行われていた。これらの戦いはいずれも私の先祖達の活躍によって勝利を収めてきた。だがこの戦いはまだ終わってはいないのだ……。

この秘宝をめぐる戦いは、IS中心の今の世界においても始まるうとしていて。

だが今やアサシンはその数を減らし、秘宝の在処も分からない……。しかも敵の勢力は世界に影響力のある企業を隠れ蓑に、私の同胞と秘宝探しに執念を燃やしている。

この状況下から生き残り、今こうして筆を取れるのも、ひとえに

私の仲間のおかげである。

だから後々の安全と平和のために、この戦い……つまり私の戦いの全てを記録しておきたいと思う。

これを読んであなたがどう思おうと自由だ。何故ならこれは私の物語であり、あなたはその読み手にすぎないのだから……。

だが忘れないで欲しい。この物語を読んで、感じたこと、考えたことを……。

願わくば、それがあなたの安全と平和につながることを祈って……

N o t h i n g i s t r u e , E v e r y t h i n g i  
s p e r m i t t e d .

20XX年 12月22日 XX XX

## プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？創作活動は初めてで至らない点もあるかと思いますが、これからよろしくお願いします。

## 第一話 ある朝の光景（前書き）

ここからが本編です。

## 第一話 ある朝の光景

IS学園。今や世界になくはならないIS操縦者を養成する教育機関である。ISの原産国である日本にそれはあり、世界各国から集まった生徒達が、ここで三年間己を磨き、青春を謳歌することとなる。

だが全ての人間がその権利を得られるということではない。

ISの適正値が一定水準以上でなかつ、難度の高い入学試験を突破する必要がある。

そして前提として女性であるということである。

これはISに乗れるのは女性だけなので当然だし、覆ることもない事実だ。

だが何事にも例外は存在する。そしてそれはISにもいえることである。

そう……ISに乗れる男性が現れたのである。

これは今までに前例がないことであり、世間は騒然となったのだ。世界中がその人物を手に入れようと行動を起こし、そのためには手段を選ばない輩も出てきた。

そのために急遽日本によって保護され、今年のIS学園に入学させられることとなったのだ。そして……

「そしてこれがその男子の資料ね……」

IS学園生徒会室。そこで紅茶を飲みながら入学してくる男子の資料を見ているのは、生徒会長である更識楯無である。

容姿端麗で文武両道、学園の生徒の中で最強の腕を持つ彼女が、朝早くから資料に目を通していているのには二つの理由がある。

ひとつは入学してくるのが男性であること。その希少性から、狙われることが多く、身柄の安全を確保することが最優先である。

生徒会長として生徒の安全を守る事は義務であり、その生徒の情報を把握しておくのは当然のことであった。

そして生徒会長としてではなく、個人として興味をそそられる事実があるというのが二つ目の理由である。

「ふ〜ん、彼はあのブリュンヒルデの弟か……。そんな彼がISを使えるなんて…何かあるのかしら？」

楯無がおもしろそうにつぶやく。ブリュンヒルデといえばISの世界大会であるモンド・グロツソの優勝者に与えられる最強の称号である。その弟がISを世界で初の男性操縦者となった。この事実には楯無個人としても非常に関心が持てた。

元より女性しか使えないという概念を壊したということもあるし、報告によるとあの篠ノ之束とも交流を持っていたこともあるらしい。もしかしたらそれがISを動かせる原因かもしれない。あるいは他の理由があるのか……。考えれば考えるほど興味が尽きることはなかった。

楯無は顔に笑みを浮かべつつ資料を読み通していく。そしてあるページでその手を止める。

「まあ私としてはこっちの方が重要なんだけど…。もしこれが本当だったら……」

「お嬢様、そろそろお時間です」

「ん……もうそんな時間か、ハイハイ今行きますよ」

生徒会役員である布仏虚に呼ばれ、楯無はこれから始まる入学式へ出席するために席を立つ。彼女には生徒会長として、全校生徒の前で挨拶するという今学期初めの仕事が待っている。

「それで、接触は何時なさるおつもりですか？」

身だしなみを整えながら虚とともに廊下を歩いていると、不意に彼女が話しかけた。

「そうね……、早くとも今日の放課後には会いたいかな……。でも、入学式でウインクして悩殺つてもアリね」

「そうですか……、あまりやりすぎないでくださいね……。特に彼には」

楽しそうに答える彼女に呆れつつも、虚は忠告する。楯無がふざけるのはいつものことだし、別段気にすることもなかった。

だが今回は相手が相手だ。慎重にことを進めないといけない。ここで手段を間違えれば、後々面倒なことになる。

それは楯無にも虚にも分かりきったことであつた。何故なら……

「分かつてるって。何せ”もう一人の彼”はアサシンかも知れないんだから……。今年からは退屈せずに済みそうね」

楯無は口元の笑みを隠すようにセンスを広げる。

それはこれからの出会いに思いを馳せてのことなのか。

それとも別の思惑があるからなのかは虚にも分からなかった。

誰もいなくなった生徒会室。そこには彼女の読みかけの資料が置かれていた。

開かれたページには”もう一人の彼”のことが書かれていた。

---

幼きころから篠ノ乃家、織斑姉弟と親交関係にあり、義理の姉と生  
活していた。

・  
・  
身のこなしにアサシンの兆候が見られる。

・  
・  
また去年から消息不明となっており、目撃証言によればイスラエル  
やイタリアにいた可能性がある。

・  
・  
以上のことから彼は少なくともアサシンの関係者であり、”エデン  
の果实”を所持、

あるいは情報を持っている可能性は大いにありうる。注意されたい。

更識家諜報部より

## 第二話 新たな一歩

入学式が終わり、全校生徒はそれぞれの教室へ戻ってSHRを受けている。そしてそれは1年1組も例外ではなかった。

今は担任の教師がいないということで、副担任が自己紹介をしている最中だ。

年上にしては子供っぽい（だが胸は自己主張しすぎている）山田真耶の話聞きながら、彼は考え事をしていた。

（何故俺はここにいるんだろうか……？）

思えば自分がここIS学園に入学することなど夢にも思わなかった。自分が何者なのかを知り、来るべき時のために一年間世界を見てきた。

だが得られたのものはあまりにも少ない……。一応痕跡を残さないように行動してきたつもりだったが、危険を犯してきたことに変わりはない。自分の正体はまだ知られるべきではないのだから……。

しかしその旅の途中に同行者が突然言い出したのだ。

「突然だけど君にはIS学園に入学してもらいま〜す〜。バイバイ」

ピースをしながら朗らかな笑みを浮かべる彼女に、始めはいつもの悪ふざけが始まったのか？ と思った。

しかしISコアに触れさせられ、自分がISを起動できると分かっ  
てしまっただけからは、拒否する間もなくニンジン型の悪趣味な口ケツ  
トに無理やり押し込まれ、気が付いたら自分の家の前にいた。

姉は一年間消えていた自分が突然帰ってきたものだからびっくり

していたが、いつもどおりに接してくれた。

それからは姉とよく話し合っておりある決意をした後、男なのにISを動かせるようになった親友とともにこの学園に通学し、今に至る。

そんな事を考えつつ彼は意識を戻す。何故自分にISが動かせるのかは分からないが、今はこの学園生活を大事にしよう。自分が戦えるようになるまでには、まだ知識も経験も足りない。ならばせめてこの学園生活で己を磨こう。

そう決めた事を思い出し、改めてまわりを見てみると、クラス中の女子がこちらを注視していた。

クラスに二人もISが動かせる男子がいるのだから当然だといえた。

（さすがに入学式で生徒会長にいきなりウインクされたのには驚いたが……）

しかし特に気になったのは窓際の席と後ろ側の席からの視線だ。

窓際には、忘れるはずもない幼馴染がいた。髪をリボンで結び、凛々しい顔付きをした少女……。見た瞬間彼女だと分かったが、目を合わせた瞬間、顔を紅くして目をそらされてしまった。

（彼女は昔から恥かしがり屋だったからな……）

後ろ側には、気の強そうなブロンドの髪の少女がいた。どこことなく貴族の気品が漂う彼女の視線は、興味以上に敵意が感じられた。彼の今までの人生で彼女に会ったことはないし、恨みを買うような真似もしていないはずだ。しかし自分が男だと考えれば納得がいく（悲しいことに今の女尊男非の世の中では、女性が男性を見下すのも珍しくないからな。だがそれ以上にあの感情は……）

そう考えている間にもSHRは生徒の自己紹介に進んでおり、今

は自分の隣に座る親友……、織斑一夏の番となっている。

だが何か様子がおかしい。副担任である真耶の呼びかけにも全く応じず、別のことに気にしているようだ。半泣きになりながら必死に頭を下げている彼女を見て、ようやく気づいた一夏は彼女を宥めつつ席を立つ。

（あれはかなり緊張しているな……。まあ俺でもきついがな……）

何せ今まで二人の男子に分散していた視線が一斉に、集中するのだがらたまったものではないだろう。見ると一夏は誰かに助けを求めるように視線をしどろもどろさせていた。

さすがに見ていられなくなり、一夏と視線が合うのと同時に軽くなずいてやる。

（大丈夫、お前ならできるぞ。友よ）

それを見て一夏は落ち着きを取り戻したのか、うなずき返すと背筋を正し、自己紹介を始める。

その誰が見てもかつこいいと感じるほど整った顔には自身が満ち溢れ、それを見たクラスの女子の顔は紅くなっているように見える。

これは期待できるかもしれない。だが現実には甘くはなかった。

「織斑一夏です！ ……よろしくお願いします！！ ……以上です！」

『えええええー！ ……？』

その瞬間クラスの女子の一部が盛大にずっこけた。

威勢がいいのは高評価だが、いくらなんでも自己紹介で名前だけというのはまずい。

特にたつた今入ってきた彼女に聞かれるのは……

パン！！！！

「お前は満足に自己紹介もできんのか？」

「げえっ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そういつて教室に入ってきて、一夏の頭を出席簿で叩いたのは、自分も良く知る人物だ。

彼女は真耶に会議で遅れた非礼を詫びると、その凜とした表情を生徒に向け自己紹介を始める。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

それを聞いた瞬間、まわりの女子が一斉に歓声を上げる。だがそれも当然のことだろう。

彼女、織斑千冬はISの世界大会モンド・グロツソの一回目の優勝者であり、歴代IS操縦者の中でも最強といわれている。その圧倒的な強さと美しさは人々を魅了し、まさにブリュンヒルデの名にふさわしい存在となっている。

そして彼女は自分の恩人である。かつて自らの在り方に悩んでいたのを助けてくれたのは、他ならない彼女だった。

それらの事を含め、自分は彼女のことを純粹に尊敬していた。武人としても人間としても、彼女のようでありたいと思っていた。

(口ではああいう乱暴なことを言うけど、面倒見もよくて頼れるいい人だよな……。だから俺は今も……)

パンン！！！！

「ぬおっ!?!」

だがその思考は彼女の一撃によって中断させられた。彼女の主席簿は、彼といえども避けられるものではないのだ。

「今失礼な事を考えなかったか？」

「逆ですよ、逆!?! むしろあなたの事をずっと想っていました」

叩かれた頭をさすりながら、自分は思ったままのことを口にした。本当のことを包み隠さず話したほうが身のためになると判断したためである。

昔から彼女につく嘘は何故かすぐバレるし、嘘をついてまた叩かれるのも可能ならば避けたかったのだ。だがそれがいけなかったのか、何故かまわりの空気が凍ってしまった。一夏に至っては、またかといった呆れた表情をしている。

しかも一部の女子がわなわなと震えていたり、頬を紅く染めているのはどういふことなのだろうか？

真耶にいたっては顔がゆでダコのようになり、入学初日から教師と生徒の禁断の関係なんて……。などつぶやいている。

千冬も一瞬呆然としていたが、すぐに復活し自分にするどい視線を向ける。若干照れているのは気のせいだろうか？

「ほお…生徒風情が教師を口説くとはいい度胸じゃないか？」

「まさか……そんなこと恐れ多くてできませんよ。尊敬しているの

は事実ですが…」

「そうだろうな……。お前がそうなのはいつものことだからな。もう何も言わん」

何がいつものことなのか自分には分からないが、千冬もこのままでは埒が明かれないと思ったのか、自己紹介を続けさせる。

何にせよ理不尽な追求から逃れられたのは、運が良かった。そう気持ち切り替え、クラスメイト達の顔を覚えていく。交友関係が今後どうなるかは分からないが、悪くしたくないと考えていた。

そう考えている間にも自己紹介は進んでいき、とうとう彼の番が回ってきた。

先ほどよりも女子の視線が突き刺さってくる。良くも悪くも先ほどの発言が誤解を招いてしまったのが原因だろうか？

だが背に腹は変えられない。一夏は先ほど自分がしたようにガッツポーズで励ましてくれたし、千冬もやってみせると目配せしている。

「それでは自己紹介をお願いしますね」

「はい」

真耶に呼びかけられて彼は返事をして立つ。

自分も、そして世界もどうなっていくかは分からない。だからせめて今はいい学園生活を送れるように頑張ろう。

そんな決意を胸に秘め、彼は口を開く。これからの安全と平和を願って……

「四条カムイです。みなさんは俺が男なのにISに乗れる特別な存在だと認識していると思います。ですが俺はそうは思いません。なぜならISに只乗れるだけで優れているとはいえないからです。大

事なのはISを扱えることではなく、その知識や技術で何ができるかだと思えます。その答えを探すため、みなさんとこれから切磋琢磨していきたいと思えます。二人しかいない男なので、みなさんに迷惑を掛けるかもしれないが親友の一夏ともどもよろしくお願います！」

そういつてカムイは頭を下げた。だが教室はまたも静まり返ってしまった。今の発言に嘘偽りはない。きちんと考えた上での発言だ。いくら女性中心の社会だからといって、無条件で偉いというわけではない。だから言いたい事ははっきり言う。聞き様によっては、ISに乗れるだけで偉いと思っっている女性を馬鹿にする発言とも受け取られかねない。今の女尊男非の世界を真っ向から否定する発言は、何人かの女性を敵に回すことになるだろう。だがこの現実を認識してもらわなければ、これからの学園生活はうまくいかないだろうとカムイは考えていた。

そして沈黙を破ったのは、敵意ではなく敬意のこもった拍手だった。そしてそれはやがて大きくなり（全員ではないが）彼を祝福したのだった。

「きゃ〜素敵！」

「すごい〜！今時の女性にあそこまで言うなんて普通じゃできないよ〜」

「イケメンですごくかっこいい……。嫌いじゃないわ！」

「これからもよろしくねカムイ君。一緒にがんばろう」

その後SHRはチャイムによって終わりを告げ、彼らの日常が始まっていくのだった……。

「しかし一時はどうなることかと思っただが案外うまくいくもんだな」  
「どこがだ友よ。むしろお互い大火傷だっただろう……」

一時間目の授業が終わり、安堵の息をついている一夏をカムイが軽く諷める。

授業自体は滞りなく終わった。IS学園に入学が決まってから二人で猛勉強し、何とか初歩的な知識だけはモノにしたのだ。

カムイとしても、マスコミが蔓延る織斑家に気づかれずに進入するのはいい特訓になった。

「……まあな。でもお前がいきなり千冬姉に告白した時は流石に驚いたぞ」

「確かに俺の言い方が悪いかもしれないが、あれは……」

「分かってるよ。でもお前ももう少し自分の容姿を自覚しろよな。初対面の奴じゃ絶対勘違いするぞ」

今度は一夏がカムイを諷める。一夏も彼とは長い付き合いだから分かっている。カムイは昔から良くも悪くも正直すぎるのだ。そのためにカムイは、口説き文句のような言葉も女性に対して無意識に発してしまうことがある。それに自覚していないだろうが、カムイの容姿は他の同姓と比べても比較的整っている。特に彼のやさしさを体現しているかのような笑顔は、過去にカムイと関わってきた親しい女性を虜にしている。

過去に一夏はカムイにそう言ったのだが、それはお前だとカムイに返されたときは何を言っているのか理解できなかった。

「まあ何にせよ同姓が、しかも友が近くにいることがこんなに心強いとはな……」

「全くだ。カムイがいてくれてホントによかったぜ……」

そういつて二人は教室を見渡す。そこにはクラスメイトによる包囲網が完成していた。

正確に言えば誰が話しかけるべきか互いにけん制し合い、そのような殺伐な雰囲気となってしまうているのだが……

いかに修行を積んだカムイや鈍感な一夏でも、これだけの好奇の視線に晒されれば多少萎縮してしまうのも仕方ない。

……  
そんな状況の中、窓際の席から歩いてくる女子生徒がいた。大和撫子を体現したかのような、日本人らしい美しさを身に纏い、ポニテールを揺らしながら彼女は二人の男子に近づいていく。そして……

「……ちょっといいか」

「……え？」

「……久しぶりだな。………箒」

一夏は呆けた顔をしていたが、カムイは話しかけてきた彼女との再会を喜び、言葉を返す。

それがカムイと、これから長い付き合いとなる篠ノ之箒との再会だった……

## 第二話 新たな一歩（後書き）

やっとオリ主が出てきました。改行や人物の視点など、実際に書くとなるとやはり難しいものです……

**第三話 剣道少女と貴族少女（前書き）**

今回は無駄に長くなってしまった……

### 第三話 剣道少女と貴族少女

IS学園屋上。緑が生い茂り、景観のいいこの場所に男女三人が集まっていた。

織斑一夏、四条カムイ、そして篠ノ之箒……

初めは廊下で話そうとしていたのだが、あまりにも野次馬が多いため、屋上で話すことになった。しかし授業の合間の休み時間のため、恐らく挨拶程度で終わってしまうだろう。だが例え短い間でも、この会合にはそれだけの価値があるカムイは感じていた。

小学1年のころに知り合い、それからずっと交友関係を築いてきた。ともに学び、鍛え、遊んだ日々は今でもはつきりと覚えている。だが小学4年のころ、ある理由により箒とは離れ離れとなってしまっていたのだ。しかしどんなに長い年月が経とうとも、カムイが彼女を忘れるはずがなかった。

昔は寡黙で、建物のてっぺんに登る等の数々の奇行により友達がいなかったカムイにとって、一夏や箒はかけがえのない友人達なのだ。

（そういえば俺が自分の正体を知ったのもあの時か……。だからあの人は……）

「その…久しぶりだなカムイ」

「ん？」

思考の海に沈みそうになったカムイに箒が声を掛ける。だが教室の時とは違って照れているのか、顔をそらしており頬も紅い。

だがそれはカムイも同じだ。六年ぶりにあつた彼女は、昔の幼い面影を残しつつも女性としての魅力を醸し出していたのだから……。カムイもそんな彼女の姿に緊張しつつ、自分の気持ちを言葉を紡ぐ。

「ああそうだな。何ていうか……綺麗になつたな、箒」

「な、何を言い出すんだお前は！？いきなり綺麗などと……」

「い、いや……俺は本心を言つたまでで……」

「ふえっ！？……お、お前っ！先ほどの織斑先生の時といい、デリカシーが欠けてるんじゃないのか！？」

箒は先ほどよりも頬を紅くしつつ、声を荒げる。だがこれは嫌悪からではなく、羞恥から来ているものだ。

しかしこれでは久しぶりの再会どころではない。昔とは違うカムイに箒は戸惑っていたが、やがて落ち着きを取り戻す。

「……確かに、一夏に言う通りだったな」

「だから言つただろ。俺は昔も今もカムイのままだと思っただけだな」

何かを思い出したのか、どこか納得した様子の箒に、先ほどから空気だった一夏が答える。それをカムイは訝しげな表情で見つめていた。

だがカムイには一夏の言葉は不快ではなく、むしろ今の自分の存在が認められているようで嬉しかった。

「そういえば一夏は箒と去年会つていたんだよな？」

「おう。剣道の全国大会は男女とも同じ日に行われていたしな」

「そうだな。私と一夏もその時に再会できた。お前のことも聞いていたぞ」

だがそんなカムイも二人の偉業を思い出すと改めて二人に問いかけた。 箒の実家は剣道の道場であり、よく三人で稽古を積んでいたのだ。

箒は途中で引越してしまい、カムイもそれを機に剣道をやめてしまった（最も彼には別にやることがあったからなのだが……）。しかし箒と一夏はそれぞれ地道に鍛錬を続け、ついには大会で優勝するまでになったのだ。

「それに箒……」

「な……、何だ」

何かを言いたそうなカムイに箒は思わず身構える。昔とは違い、今の彼はどんな事をしてくるか分からないからだ。また慌てた姿を晒したくない箒は警戒していたのだが、次の一言で彼女の警戒網は一瞬で突破されてしまう。

「一夏にはもう言ったんだが…、これまで色々あったと思うがよく頑張った。本当におめでとう」

「あつ……」

その労いの言葉を聞いた瞬間、箒の中で今まで詰まっていた想いが噴出しそうになった。半ば強引にIS学園に入学させられ、もう二度と会えないと思っていたカムイに会えただけでなく、こうして健闘を称えてもらっている。

そしてその言葉は他の誰のものよりもうれしく感じられたのだ。この世に神がいるのならば、箒は思わず拝まずにはいられなかった。

何故なら彼女にとってのカムイは……

キーンコーンカーンコーン

だがここで幸か不幸か、授業開始のチャイムが鳴ってしまふ。それを聞いた三人は一斉に慌てだす。

「まずい、早くしないと千冬姉に殺されるっ!? 早く戻らないと!」

「もう遅いだろ……。まあ時間を忘れるほど嬉しい思いができたんだ。もう悔いはないさ……」

「何言つてんだよカムイ!? ほら、箒も早く行くぞ!」

「あ、ああ」

若干顔が青ざめている一夏が、逝く覚悟を決めたカムイと慌てている箒を急かし、駆け足で教室へと戻る。

(あそこでもしチャイムが鳴っていなかったのなら、私はどうしたのだろうか……)

箒は走りながら考える。積年の想いを勢いで告げていたのだろうか? それともまた恥かしさのあまり彼を突っぱねていたのだろうか? 今となつては分からないが、そんな事は些細なことだ。何故ならこれからカムイと過ごす時間はいくらでもあるのだから……

これから彼と過ごす学園生活に想いを馳せながら、彼女は自然と笑みを浮かべる。

(今度こそ私は逃げない……。カムイに私の想いを伝えて、それから……)

「ほう……、そんなに私に叩かれるのがうれしいか。ならば望みどおりにしてやるぞ篠ノ之」

スパパパアアン!!!

いつの間にか戻っていた教室で、篝は千冬に出席簿による手厚い洗礼を受けたのだった。

「お前のせいだ！」

「何故そうなるんだ？」

結局遅刻してしまった二時間目の授業が終わり、カムイは篝と窓際に話をしていた。恐らく先ほどの出席簿による脳細胞暗殺のことを言っているのだろう。

カムイとしては思い切り叩かれて涙目になっている篝の姿に、女の子特有の可愛さを感じていたのだが、話がこじれるので言わないでおく。

「それにしてもやはり二週間であの内容を覚えるのはキツすぎたか……」

「む……。だがお前は答えられていたじゃないか？」  
「偶然だよ。あれは単に一夏の運が悪かったただけだ。」

カムの急な話題転換に納得のいかない篤だったが、あのまま話を続けていても埒が明かれないと思ったのか、その話題に食いつく。

それというのも、先ほどの授業で副担任の山田真耶にいくつか授業に関する質問をされ、一夏はそれに答えられなかったのだ。

確かに彼らがISに乗れるのが判明したのは数週間前であり、膨大な量の教科書を内容を覚えるのには時間が足りなかったということはある。だがカムも一夏も、それなりの覚悟を持ってIS学園に入学している。それを理由に妥協する気は更々なかった。一夏が自分の席で分からなかったところを復習しているのが何よりの証拠だ。千冬にもその覚悟が伝わっているのか、授業中に何も言われることはなかった。

「それに一夏は今日の放課後には山田先生と二人きりで補習だからな。まあ大丈夫だろう」

しかし真耶が一夏を励ましたまではいいが、補習を頼まれた際のあのうろたえようは半端なかった。

もし千冬がフォローしていなければ半永久的にトリップしていたことだろう。早く男に慣れてくれる事を祈るばかりだ。

「……もしや一夏がうらやましいのではあるまいな？」

「何だつて？ 確かに山田先生は優しく教えてくれそうだが……」

そんな事を考えていると不意に篤が恨めしそうにつぶやいた。カムイにはその発言の意図が分からなかったが、それが嫉妬のように感じられた。

久しぶりに会った友人が、自分ではなく今日初めて出会った人間のことを考えているのが気に入らないのだろうか……？

カムイにはその嫉妬心の理由が分からない、いや分かるうとしたかったのかもしれないが、とりあえずフォローしておくことにした。

「確かに補習が受けられる一夏はうらやましいよ。でも山田先生に迷惑が掛かるかもしれないし、今日のところはお前に聞いてもいいか？」

「えっ……あ、ま……まかせておけ！！ 私教えるからには泥舟に乗ったつもりでいるがいい！！！」

「……よろしく頼む。できれば沈まない舟に乗せて欲しいんだがな」

カムイの要求に始めは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた筈だったが、自分を頼りにされたのが嬉しかったのか、急に立ち上がり力強く宣言する。

その気持ちの昂りによって、大船を泥舟と間違えたのだろうか？それほど筈が舞い上がっているのが、目に見えて分かる。

泥舟に乗せられるのは勘弁願いたいが、筈のうれしそうなお表情を見てカムイも表情を和らげる。

はたから見れば友人として以上のやり取りに感じられるその光景に、クラスメイトは羨望の眼差しを向けるのだった……。リア充爆発しろ。

しかしそれらの視線は羨望だけではない。教室の後ろの席からは、彼らが一夏をまるで品定めするような視線が向けられていた。

「……………」

「……箒。金髪の彼女のこちらを見る視線がやけに鋭いような気がするんだが……」

「ああ、セシリア・オルコットのことか。あいつは”今どきの女”だからな。気にする必要もないだろう」

「そうか……」

カムイはそう言いつつも、入学時に全校生徒に配られた新入生の名簿から彼女の情報を引っ張り出す。

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で、入学時の成績も優秀。IS適正もA+であり、更に専用機持ちである。

彼女の専用ISであるブルー・ティアーズは最新型である第三世代の中距離射撃型であり、最大の特徴は固定武装の自立機動兵器である”ビット”ブルー・ティアーズ”である。

実技試験で試験官を倒したと記してあることから、高いレベルで使いこなせているのは明白だろう。

「なるほど……、まさにエリート中のエリートというわけか」

「だがあの様子ではな……お前や一夏のことも許せないのではないか？」

たしかに見た限りでは、彼女のプライドは高そうだ。先ほど彼女に話しかけていた袖の長い制服を着たクラスメイトを、突っぱねている様子からもそれは伺える。

箒の言った”今どきの女”とは、ISに乗れない男性を馬鹿にしている女性のことだ。

おそらく1年の中では一番の実力を持っている自分ではなく、男であるというだけでまわりから注目されている……、それが彼女には許せないのだろうか？

S H Rでの敵意のこもった視線も、彼女が男を見下しているからなのだろうか？

だがカムイはそうは思わなかった。何故なら彼女のさりげない振る舞いの中に、貴族らしい気品が見え隠れしているからだ。入学式に向かう途中で道に迷っている新入生をさりげなく助けていたのを見かけたし、今もなお彼女に向けられている視線も、S H Rでの彼の自己紹介の後から若干和らいでいる。

つまりプライドが高いといっても傲慢というわけではなく、寧ろ礼節をわきまえ、相手の良い所は認められる潔さを持っていると考えられる。

更にI Sに対する姿勢も評価できる。先ほどの授業での質問もすらすら答えられていたし、その説明も理論的（難しすぎて分かりづらかったが）であることから、知識は豊富なのだろう。そして自身の専用機を試験官を倒すほど操れるということは、I S適正という才能以上に努力しているということは考えれば明白である。

ノブレス・オブリージュ。彼女を一言で表現するのならこの言葉しかないだろう。それだけカムイは彼女のことを評価していた。

正確にいえば彼の中に流れる”血”がそうさせているのだが、今それを語る必要はないだろう……。

（何にせよ彼女と直接話さないことには何も分からないか……）

そう考えつつ篇と別れたカムイは、次の授業の準備をするために

自分の席へ戻るのであった。

だが彼女と話すどころか、それ以上の展開となることをこの時の彼には知る由もなかった……。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目の授業はより実践的な講義ということで、真耶ではなく千冬が教壇に立っていた。

しかし誰が教鞭を取ろうと関係ない。カムイはそう思いつつ教科書を広げようとするが千冬の一言でその手を止める。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

（クラス代表か……まあ俺には関係ないし、なれるはずもないな）

クラス代表とは文字通りクラス長のようなもので、先ほどのような対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席が義務付けられる。

当然責任感の強いものになるべきだし、対抗戦の優勝者のクラスは様々な特権が与えられることから、ISの実力の高さも求められる。

しかも任命されてから一年間は変更できないので、今後のことも考慮に入れつつ慎重に選出する必要性が出てくるのである。

「ちなみに自薦他薦は問わないぞ。なお選ばれたものには拒否権はないから覚悟しておけ」

（あいかわらず厳しいな。まあ少なくとも今の俺にはISの実力が足りてないし、選ばれる心配もないか……）

カムイの中にも、自分のISの実力が他と比べてどれほどのものか知りたいという欲があった。しかし自分のISの適性ランクは同じ男の一夏に比べて低い（一夏がBなのに対し、カムイはC）。

ランクの低さを技量でカバーできればいいのだが、生身の時と違いISを纏っての戦いとなると、搭乗時間が圧倒的に少ないカムイにとってはまだ荷が重すぎた。

カムイのISランクの低さは生徒名簿を見れば一発で分かるし、なりより適任はすでにいるではないか。先ほど彼を見つめていた彼女になら任せられるだろう。

そう考えたカムイがセシリア・オルコットを推薦しようと挙手しようとしたその時、

「はいつ。織斑君を推薦します」

「私は四条君が良いと思います」

どこからか自分達を推薦する声が聞こえた。一瞬自分の耳を疑ったが、まわりも次々に賛同していることからどうやら間違いではないらしい。

そしてそれによりカムイは出鼻を挫かれ、セシリアを推薦するタイミングを逃してしまった。

「お、俺!？」

一夏も驚愕のあまり思わず席を立ってしまふ。彼女達がどういう意図で自分達を選んだのかは分からない。

だがもし興味本位で選んだのだとすれば迷惑なことこの上ない。しかも拒否権がない以上、反論の余地がない。

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて他にはいないのか？いないのなら二人の中から……」

このままいけばクラス代表はカムイが一夏のどちらかになるだろう。カムイは席に着いた隣の一夏を見やる。

先ほどとは違って一夏の顔には戸惑いは感じられず、すでに腹をくくったのか、こちらを見返して軽くうなずいてきた。

（覚悟を決めたのか一夏……。ならば俺も負けていられないな。そうと決まれば……）

そしてカムイも彼に対して首肯を返そうとして……

「待ってください。納得がいきませんわ」

話の流れを遮るかのように彼女は立ち上がった。ブロンドの長髪をたなびかせ、その仕草には気品が漂う。

まさに優雅な英国淑女を体現したかのようなその生徒の名は……

「セシリア・オルコットか？」

カムイに名前を呼ばれた彼女は一瞬彼に目を向けるが、すぐにクラス全体に視線を戻す。

「確かに織斑さんの授業に対する姿勢は男にしては見所がありますし、四条さんの自己紹介にはわたくしも考えさせらるモノがありましたわ。ですがそれがどうしたというのですか？ ISに満足に乗れないような男を代表に選んで一年間恥をかけというのですか？ 考えられませんか」

（なるほどよく見ているな……。だがやはりプライドがそれを許せないのか？）

彼女にも分かっているのだろう。クラス代表の責任がどれほど重大なのか。だからこそ許せないのだ。興味本位でカムイ達を選んだクラスメイトが、実績もないのに代表になろうとしているカムイ達が……

「例えて言うなら今の彼らは必死に人間の真似をしようとす猿同然ですわ。猿は猿らしくおとなしくバナナでも食べていなさい」

セシリアがカムイ達をそう罵倒した瞬間、一部の生徒は顔を伏せ始めた。おそらく笑いを堪えているのだろう……。

彼女はカムイや一夏がISに乗る女性の猿真似をしていると言いたいのだろうが、表現がいささか稚拙ではないだろうか？

それに相手を諭すのではなく、敵意を生むかのような発言は、彼の考えていたセシリアの姿らしくない。

「おい！ 何だその言い草は！ 馬鹿にするにしても言葉を選べよ

！ 何様のつもりだ！！」

「あら、野蛮ですこと……。やはり猿は怒ると喚き散らすことしか能がありませんのね」

「てめえ……」

セシリアの言葉を聞いて激昂した一夏が怒りをあらわにする。彼女の罵倒に憤っているのだろう。

そして確実に教室の雰囲気は悪くなっていた。真耶はどうすればいいか分からずオロオロしているし、箒にいたっては怒りの籠った視線をセシリアに向けている。

この状況の中でカムイは考えていた。セシリアの意図は何なのか？ 自分達を罵ってまで果たしたいこととは何か？

千冬が一連の流れを黙認しているところを見ると、おそらく彼女には何故なのか分かっていているのだろう。

まだはつきりした訳ではないがカムイにも分かっていることがある。それを確かめべく彼は行動を起こす。

「おい、セシリア・オルコット」

「何ですか四条さん。あなたはもう少し利口だと思っていたのですか……」

「そんなに俺達が怖いか？」

「……っ！？」

カムイの一言が凶星をついたのか、セシリアは押し黙ってしまふ。その反応にカムイの予想が確信に変わる。

「確かにISの知識も実力もある君の方が、クラス代表には相応しいだろうな」

「そうですね。どう考えても自他共にわたくし以外に適任はいな

「いいと思いますが？」

「だからこそ、自分の実力以上に俺達の存在そのものが評価されている現状を恐れているんだろ？」

セシリアの問いかけにカムイが冷静に答えていく。その答えに対して、セシリアもまた反論することなく落ち着き払っていた。

おそらく二人とも分かっているのだ。お互いが何を考えているのかを……。

男というだけでクラス代表に推薦されたカムイ達。それだけの理由で自分の実力が評価されないセシリア。

そして彼女は恐れているのだ。ISの知識も実力も無いような連中のために、自分が否定され無視されるこの原状を。

「何をおっしゃるのかと思えば……、わたくしもずいぶん見くびられたものですわね」

「始めに馬鹿にしたのはそっちだろ。代表候補生だがなんだか知らねえが、お高くとまってるんじゃないかねえぞ」

セシリアの発言に一夏が噛み付く。彼もまた自分やカムイの決意を蔑ろにされたのが許せないのだろう。

だがセシリアはこうなる事を分かっていたはずだ。だからこそ今もなおカムイや一夏に敵意を持たせようとしている。

「オルコット、このままでは埒が明かない。そろそろ誰が代表にふさわしいのか、決めるべきではないか？」

「同感ですわ。ここはIS学園……。ならばここで起きた問題もISで片を付けるのが妥当でしょう」

カムイの意見にセシリアがほくそ笑みながら同意する。二人ともどのように問題を解決すべきなのか分かっていた。

カムイ達は自分達に代表が務まる事を証明したい。そしてセシリアは自分の実力を改めて示し、皆に認めてもらいたい。

ならばISの実力を相手に見せ付けてやればよい。だからこそセシリアはわざと二人を煽り、戦意を持たせようとしたのだ。

「やっとあなたもやる気になっていただけましたか……。ならば今こそあなた方に決闘を申し込みますわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「仕方がないか……。俺達も覚悟した以上、逃げるわけにはいかないんだ」

セシリアの提案に、一夏とカムイは同意する。実力差は明らかだが、彼らの覚悟はその程度のことには怯みはしなかった。

そしてここにきて千冬は口元に笑みを浮かべていた。まるでこうなるのを待ち望んでいたかのように……。

千冬は真耶に耳打ちし、何かの確認を取らせる。そして報告を受けると顔を引き締め、生徒達の方に向き直った。

「話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後の第三アリーナで行う。細かいルールはあとで定めるとしてそろそろ授業を始めようか」

そう言っって千冬が手を付いて話を纏める。おそらく先ほどは、真耶にアリーナが使用できる日を確認させていたのだろう。

つまりあと一週間彼らに猶予があるわけだが、現状としてはかなり厳しいものがある。

何故なら彼らが相手をするのはイギリス代表候補生であり、ダメ押しと言わんばかりに専用機まで所持している。

このような状況下で果たして彼らはどのように戦うというのだろうか……？

(どうするつもりなんだ？あいつらは……)

篠ノ乃箒は一連の流れを見て、本人達以上に動揺していた。

1年で最強の実力を持つセシリアに対しても自分を曲げなかったカムイや一夏には感心したが、正直なところ、箒には彼らが勝てるとは到底思えなかった。

それはまわりの女子達も同じようで、各々の表情に彼らが勝負を受けたことに対する不安、呆れなど現れていた。

箒とて彼らを信じてやりたいし、失笑や苦笑を浮かべているクラスメイトを怒鳴りつけてやりたい気持ちもあった。

しかし圧倒的不利な状況では、そうしたところで意味はない。せめて彼らに専用機があれば……

「どうした四条。早く席に着かんか」

そのような事を箒が考えている時、千冬が未だに立っているカムイに注意しているのに気づいた。

その目はセシリアを見据えているように見える。

「あら、どうしたんですの？まさか今更やめたいなど言うつもりではないでしょうね？」

「さあな……、だがお前に一言だけ言っておきたいことがある」

カムイの視線に気づいたセシリアがそう問いかける。心なしか失望しているようにも見える。

だが箒はあの目を知っている。あれは何かをあきらめた目ではない。

それは幼い箒を守り、大事な事を教えてくれた時の目だった。

（そうだ……私の知ってるカムイはどんな時でも何かを諦めなかったりはしなかった）

確かに分は悪いかもしれない。だが私にも手伝えることはあるはずだ……。

そう考えて箒は……

「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだぜ……、セシリア！」

盛大にズツこけた。あいつは今なんと言った。見るとカムイはセシリアを、自身の覚悟を彼女に再認識させるかのように見つめている。

その瞳には決して権力や恐怖に屈しないような力強さが籠っていた。

そんな突然のカムイの発言にまわりも呆然としている。だが一夏はまるで懂れていたヒーローを見つめるかのようにカムイを見つめていた。

（確かに今の顔はカッコいいが……って何を考えているんだ私は！

?)

そういつて雑念を振り払うかのように頭を振る。だがその雑念を抱いたのはどうやら筭だけではなかったらしい。

「あ、あなたは突然何をおっしゃっているんですの!？ そんな顔をしたところで全然カッコよくななんてないだから……」

「えっ？ お前何か勘違いをしてるんじゃないか？ 今のは俺の覚悟を……」

カムイの顔を直視してしまったセシリアも顔を紅くし、動揺を隠すかのようにカムイから顔を思い切り背けた。

宣戦布告のつもりで言った言葉に対する予想外の反応に、カムイは訳が分からないような顔をしている。

スカッパパパパパン!!!

「うおっ!？」

「お前は何時から女たらしになったのだ」

そんなカムイを千冬の出席簿による強烈な突っ込みが襲ったのだ。  
った。

### 第三話 剣道少女と貴族少女（後書き）

気付いた方もいると思いますが、一夏君の設定が原作とは少し変わっています。早く彼らを戦わせたいのですがまだまだ先は長そうです……

#### 第四話 友の決意と真っ赤なりんご（前書き）

今日初めて感想をいただきました。作者としてこれほどうれしい事はありません。ありがとうございます

#### 第四話 友の決意と真っ赤なりンゴ

四時間目が終わり、カムイや他のクラスメイト達は、学校にしては豪華な食堂でランチタイムを満喫していた。

カムイは恥ずかしさからか篝の隣には座りたがらなかったのだが、篝は一夏に目配せ（という名の脅迫）をするとカムイの腕を取り、そのまま彼を自分の隣に座らせてしまった。余談だがその時の篝の顔がリンゴのように真っ赤になっていた。

「大変なことになっちまったな……」

日替わりランチを頬張りながら、織斑一夏は心の中で盛大にため息を吐いた。

三時間目のセシリアとのやり取りの後、張り切って授業を受けたのはいいが、ついていくのがやっとだった。

そのことを気にしながら、一夏は考える。そもそも何故自分があそこまでセシリアの挑発にムキになったのかを。

一夏にはある目標があった。それは単純であり、重い物であった。それを決意した当初は自分に本当にそんな事ができるのか？ 自分でなくていいのでは？ と何度も自問した。

だがISに乗れることが分かってから、それは実現できると以前より決意が強くなったように思えた。

高校の受験会場を間違えた時はさすがに絶望しかけたが、結果として現在のようなチャンスに恵まれている。

「だからあれは俺なりの決意表明であって、セシリアを口説いたわ

「じゃ……」

「そう考えているのはお前だけだ！！ げ、現に私はお前の発言を聞いてだな……」

目の前で痴話喧嘩とも取れそうな会話をしている幼馴染達を見て、  
一夏は願う。

彼らを守るほど強くなりたいと……

そう思うようになったのは小学1年のとき、箒を助けているカムイを見かけたときだ。

あの時のことは今でも心に残っている。箒がいじめられている時、尻込みしてしまつて行動できなかった自分と違い、彼は何の戸惑いも無く彼女を助けた。

思えばカムイに興味を持ったもその時だっただろうか？ 困っている人に戸惑い無く手を出せる。そんな彼がヒーローのように思えたのだ。

始めて彼を見かけたときは無口で、友達になりたくても中々きつかけが掴めなかった。

だが箒がカムイに付きまとうようになり、自分もそれに便乗していると、だんだんと彼と打ち解けていくのが分かった。

カムイは内向的だが他人を思いやることができるし、クラスメイトからのいじめにも屈することはなかった。

そんな彼に憧れ、お互いに親友と呼び合うほどの仲になるのはその時間が掛からなかった。

箒の姉である篠ノ之束がカムイに興味を持ち始めて色々やり始めた時は、一時期カムイが別人のようになってしまったこともあったが、それでも自分とカムイは強い絆で結ばれていると感じている。

だからこそくやしかった……

中学生になってからカムイが精神的に苦しんでいるとき、自分が何もできなかったことが……

かつて自分が誘拐されそうになった際も彼に助けられ、守ってやると心に誓ったはずだったのに……

結局その問題は、今は中国にいるはずの友達が解決してしまった。だができることなら自分をもっと信用して欲しかった。

カムイは傍にいてくれるだけで十分支えになると言ってくれたが、一夏はそれで納得するつもりは無い。

両親がいない自分を必死で養ってくれた姉、自分を剣の道へと引き入れてくれた幼馴染、そしてそんな自分を支えてくれた親友達……

カムイの他にも守りたい、傷つけない人はたくさんいる。

だからこそ自分自身を鍛え、最強の兵器といわれるISを乗りこなせるようになって、自分を支えてくれた人達を守りたいと決意したのだ。

しかしその決意をセシリア・オルコットによって間接的に罵倒された。

（確かに今の俺はまだ未熟だ……。だからこそこんなところで挫折するわけにはいかないんだ……）

なら証明してやろう。自分達がただ流されるままにここに来たわけではないと。例え勝てなくてもベストをつくそうと……

そして……

「おい、一夏」

「何だよカムイ、俺もお前と同じく覚悟を決めていたところだったのに……」

「それは結構だがまわりを見てみる」

そう親友に言われ、一夏はまわりを見てみる。そこには一夏の顔を見てうっとりしている大量の女子の姿があつた。自分と同じテーブルで食事をしている筈や、先ほど知り合ったのほほんさん（本名は忘れた）含む他のクラスメイト。あげくに他のテーブルの女子やカウンターのおばちゃんまで一夏に釘つけだった。

「俺何かしたっけ？」

「お前の顔だよ。今の表情はかなりカッコよかったぞ」

「いや、意味が分からないんだが？」

わけがわからない状態の一夏にカムイが説明してやる。

どうやら一夏が考え込んでいたときの表情が、まわりの女子達の純情な乙女心を射止めてしまったらしい。

一夏は自分の容姿を自覚していないため、こうして無意識のうち  
に女性に好意を持たれるといったことが多々あるのだ。

ある人物を除いては……

「カムイ、心配するな！ ……お前の顔も十分カッコいいぞ」

「えっ！？ あの、ありがとう……」

「い、いやこれはだな……」

不覚にも一夏の表情に見とれて動揺していた筈が、それをごまか  
すかのようにカムイにそう投げかける。

それに照れつつもお礼を言うカムイ。リア充は死ぬ。

自分で言っというて動揺するなよ……と心の中で突っ込みを入れつ  
つ一夏は思う。

これから自分達がどうなっていくかは分からない。だからせめて  
今ここにある仲間との日常だけでも守っていききたいと。

こうして一夏とその親友や仲間とのランチタイムは過ぎていくの  
だった……

波乱もあつたが何とか無事に全ての授業が終わり、放課後となっ  
たIS学園の廊下をカムイは一夏とともに歩いていった。

本来ならセシリアとの決闘のルールを決めているところだったの  
だが、教師である千冬と真耶が緊急の用事で出払ってしまったため、

明日へ持ち越しとなつてしまった。

そして今現在、カムイの手には二つの鍵が握られていた。これは自分たちが住むことになる寮の部屋の鍵である。片方は個室、もう片方は相部屋の鍵である。

これは男のIS操縦者が二人も発見されたということ、急な部屋割りができなかったがための応急処置らしいのだが、問題なのは片方が女子と同棲せざるを得ない状況である。

男二人で個室または女子が個室に移動で切れればいいのだが、個室は急遽作られた物で狭く居住性も悪いため、そもいかならない。これは余談だがこれを報告する山田真耶の涙目ながらも謝るかわいらしい姿に、二人の男子は色んな意味で釘付けになっていた。

「しかしいくら部屋が変えられないからっていつても、女子と相部屋ってのはな……」

「確かに。お前の場合、入った途端すぐにゴールインとかがありそうだしな」

一夏の愚痴に、カムイが同意するように答える。一夏はその発言の意味が理解できなかったようだ……。

つまり青春時代真っ只中の男と女が同室になると、色々な間違いが起こりうるということである。しかも場合によっては女子のほうから色仕掛けによって迫られ、人生を棒に振る可能性もありうる。世界で二人の男性IS操縦者ともなればなおさらだ。

「その点、相部屋の相手が篤かオルコットなら安心だな」

「いや、それはそれで問題だと思っが……」

「一夏の相手が」

「俺かよ!？」

カムイの発言に一夏が芸人に負けないほどのキレで突っ込みを入

れる。だがカムイの発言は的を射ていた。

箒ならば彼らを窮地に陥れるような真似はしないだろうし、セシリアならば敵意を持つ相手に色仕掛けなどしないだろうし、決闘の前に卑怯な手段は使わないだろう。

これは一夏が同室ならばの話だが……

(もしカムイがあいつらの同室になったらどうなるんだ?)

一夏は考えてみる。箒の場合は容易に想像できるが、セシリアの場合はどうなるか分からない。セシリアがカムイの発言である態度を取るのには意外だったが、今思えばカムイの素直な発言に好意を抱いた女性は、一夏がざつと数えただけでも三、四人はいる。それが一人増えただけだと考えれば納得できた。

(あれ、結局どっちが相手でも問題あるんじゃない?)

これからどうなるかを考えるのが恐ろしくなった一夏はそこで考えるのをやめた。

廊下にいる他の女子生徒の視線を浴びつつも、寮に歩いていく二人。

そしてカムイがそろそろ鍵の分配をしようと思ったその時、不意に一個のリンゴが足元に転がってきた。

「ごめんね、それ私のなの。わざわざ拾ってくれてアリガトね」

「……あなたは入学式の時の」

「へー、覚えていてくれたんだ。やっぱりウィンクしてアピールした甲斐があつたかな？」

それを拾い上げたカムイに声を掛けたのは、IS学園生徒会長である更識楯無だった。

青い髪をたなびかせ、おどけながらもミステリアスな雰囲気醸し出している彼女は、目の前の一夏だけでなくまわりの女子をも魅了していた。

誰もリンゴを持っていたことに突っ込まないことはさておき、カムイは彼女を一目見た時から気付いていた。

彼女の自分に対する視線の中に単純な興味だけでなく、何かを見定めているかのようなものが含まれていることに……

（この人は何を探ってるんだ？ 確かに男性の操縦者、特に入学直前まで存在を隠されていた俺は珍しいかもしれないが……？）

カムイは彼女が自分に興味を持つ理由を考えてみた。一夏とは違い、カムイは束の考え（彼女曰く「ちゃんやいっくんへのサブライズ」）で飛び入りに近い形で入学した。そのために興味を持たれているのだろう。

彼女からの視線がそろそろ鬱陶しくなったため、早々に話を切り上げようとする。

「まあ会長さんじきじきにあんな事をされては意識もしますよ。では寮に向かいますので俺達はこれで失礼します」

「あらら、残念ね。できればもっとゆっくり話をしたかったのだけ  
ど……？」

「……それはまたの機会にお願いします。ほら一夏、はやく行くぞ」  
「お、おう」

カムイに促され、一夏も戸惑いつつも返事をする。わずかだがカムイの雰囲気張り詰めているように感じたからだ。慌てて先に歩き出したカムイを追いかける。

そしてカムイが楯無の横を通り過ぎようとした時、楯無がカムイに対してつぶやいた。

「そういえばカムイ君。あなたも今”リンゴ”を持っているんじゃない？」

（何だって？）

突然の楯無の発言に、カムイは一瞬どういう意味が分からなかった。だが次の楯無の発言はとも無視できるものではなかった。

「そう……例えばアルタイルやエツイオが持っていた”エデンの果実”とかね？」

それを聞いた瞬間、カムイは腕に隠していたナイフを彼女の腹に突きつけた。だがそれは一夏、まわりの女子からは見えていない。ほとんど体を動かさず、しかもさりげなく死角に体をずらしたた

めだ。その眼は先ほどの彼のものとは違い、誰もが思わず縮み上がりそうなほど冷たいものだった。

(いきなりね……そこはとぼけるか無視するところじゃないの?)

(黙れ……。俺の正体に気付いてるんだろ……今ここで危害を加えるならお前を……)

(待ちなさい……ここで事を荒立てるのは得策ではないわ。織斑君にも見られちゃうわよ)

(……)

表面上冷静でいられたが、楯無は内心焦っていた。そしてカムイを侮っていたことを思い知らされる。

(こんなことなら虚の忠告をもうちよつと真面目に受け止めていれば良かったわね……)

何しろ自分ですら反応できない速度、しかもまわりに気取られることなく一瞬で自分を殺しかかったのだから……

楯無としては衆目の中でカマをかけ、その反応を見ようと思っていた。そして攻撃した時に備えて準備も整えていた。

だが結果として、あるうことが自分が反応する間もなく懐に凶器を突きつけられ、何もできないでいる。そして楯無はあることを確信する。

(お互い聞きたいこともできたでしょう? 生徒会室に来なさい。

おいしい紅茶も用意してあるわ)

(……いいだろう。だが俺の秘密を少しでもバラそうとすれば消すぞ)

(あら、怖い怖い。レディーはきちんといたわるものよ)

この10秒間たらずのやり取りの後、カムイは何が起こったのか分からずに呆然とする一夏に片方の鍵を預け、楯無の先導に従い、生徒会室へ向かうのだった。

IS学園入学初日、いきなり正体がバレそうになって内心焦っているカムイとは裏腹に、更識楯無は歓喜していた。

(やっと見つけた……。彼こそが本物の……。更識家が追い求めていた”アサシン”に違いないわ)

はたして彼女は敵なのか、それとも味方なのか……。それは現時点では誰にも分からなかった……

#### 第四話 友の決意と真っ赤なリンゴ（後書き）

ここまで順調に投稿してきましたが、この先はどうなることやら…  
…。次の話も呼んでいただけると幸いです。

## 第五話 裏側での駆け引き（前書き）

先日のことですが活動報告なるものを書いてみました。そして今回は予定よりも早く投稿できました。あいかわらず文章構成は難しいです……。

## 第五話 裏側での駆け引き

生徒会長である楯無に連れられてやってきた生徒会室……。下手をするとそこらの学校の校長室より豪華であるうその部屋でカムイは考えていた。

何故彼女はあのような言葉を口走ったのかを……。

アルタイル、エツイオ、そして”エデンの果実”はそれを知る者にとつては特別な意味を持つ。アルタイルは”伝説のアサシン”と呼ばれ、後世の礎となるような偉業を成し遂げたし、”最強のアサシン”であるエツイオはアサシンとして必要な様々な技を生み出していった。

この二人にはある共通点がある。それは”エデンの果実”を所持していたことである。世界に数あるアーティファクトの中でも、特に”エデンの果実”は危険なものであり、それを得た者は未来を予見したり、人心掌握の術が得られるという。大抵の人間なら欲に溺れてそれを自身のために使おうとするだろうが、二人のアサシンはそれを世界の安全と平和のために使用していた。

そのことをカムイは”実際に体験していて”知っているし、純粋に尊敬していた。

だがこれらの情報を知り得るのは、世に二種類しか存在しない。”エデンの果実”を回収・破壊して世界を守るアサシン陣営、そしてもうひとつは”エデンの果実”を手に入れ、世界を我が物にしようとするテンプル騎士団である。

つまり楯無は現時点では敵か味方か分からないのだ。だから楯無

に薦められた紅茶もつかつに飲めないし、目の前でにっこりしている彼女を暗殺するわけにもいかない。

もしアサシンの仲間ならば心強いことは間違いないだろう。だがもしテンブル騎士団ならばその時は……。

カムイは彼女の真意を知るべく行動を起こすことにした。願わくば彼女が味方であることを祈って……

「早速聞きたいんだがお前は……」

「その前に言っておきたいことがあるわ……、私の正体をね……」

先ほどまで笑みを浮かべていた彼女が突然真剣な表情になり、そう切り出す。その変わりように驚くカムイだが、注意深く彼女を観察する。

「どういう意味だ……?」

「生徒会長ってというのは言わば表の顔……、改めて自己紹介するわ。私は更識楯無……対暗部用暗部である更識家の当主よ」

「対暗部か……だが俺に何の関係がある。お前は俺の何を知っている?」

楯無の正体を知ってもカムイは動揺することなく話を進める。彼女が“エデンの果実”の存在を知る時点で裏の人間ということは明白だったからだ。そして彼女からは今のところ敵意は感じない。

「そうね……、今のところはあなたがアサシンであり、”エデンの果実”を持つてるかも……ってところかしらね」

「何故そう思う?」

「私の部下に調べさせたの……、ありとあらゆる手段を使ってね。」

まああなたの同行者には手こずらされたけどな」

そう言っつて楯無は本当に苦労したわと言いながら微笑みかける。対してカムイは更に警戒を強める。

彼の同行者は世界一の頭脳を持ち主であり、今まで自分の存在が外部に漏れなかったのもその人物のおかげであるからだ。それが知られているという事は……。余計に考えることが増え、混乱しているカムイに楯無は語りかける。

「だけどそれだけの価値はあつたわ。だつてついに奴らの野望を阻止する希望が見つかったんだもの……」

「奴ら……?」

「そう……、君や私達の平和を脅かす敵、テンブル騎士団よ」

テンブル騎士団……、はるか古から存在し、世界に散らばるアーティファクトによって新世界をつくり、それを支配するために暗躍する組織である。

アルタイルやエツイオなどのアサシンは、長年に渡り”エデンの果実”をめぐつて彼らと対決しており、その戦いは今もなお終わりを迎えてはいない。

そしてカムイにとつてもまた、テンブル騎士団との戦いは逃れられぬ宿命であるといつても過言ではないのだ。

楯無はカムイの敵であるテンブル騎士団を敵と断言した。ならば彼女の真意は何なのか？

「テンブル騎士団が敵だと……?」

「そういう事よ。私たち更識家は代々アサシン達と協力してきた。だから信じて欲しいの……。私はあなたの味方よ」

そう言つて楯無は再び微笑みかけ、左手の薬指を曲げてカムイに掲げた。その行為と彼女の真剣な表情を見たカムイは、一瞬驚いてしまった。

左手の薬指……。それは”伝説のアサシン”であるアルタイルに欠けていたものだった。彼女の行為は、アサシンに敬意を表する証なのだ。

そして彼女の表情……。そこに悪意は感じられず、むしろ安心感すら漂わせている。自分を落としれようとしているとは考えられなかった。

「……それを証明する手立ては？」

「今まで私たちが手に入れてきた情報。そしてあなたのこれからの行動に対する支援で示していくのはどうかしら？」

楯無の答えにカムイはどうするべきか悩んでいたが、とりあえずの結論を出すことにした。

「……分かりました。とりあえずあなたを信じます」

今までののやり取りから、少なくとも彼女が敵でないとは判断した。仮にテンプル騎士団なら、カムイが一種の閉鎖空間であるIS学園に入学する前に手を打つだろう……。それが自分では無く”エデンの果实”を狙っていたとすればなおさらだ。

それに現状としては仲間が欲しいというのもあった。ISが普及した現在、テンプル騎士団は巨大な企業を隠れ蓑にして活動している。

巨大な規模を持った敵に同行者を含む二人だけで相手にするのは無謀であり、勝てる見込みもなかっただろう。だが仲間が増えれば勝機も見えてくる。

しかしカムイが彼女を信じた理由はそれだけではなかった。

「理由を聞いてもいいかしら……？　あなた、何か悩んでたでしょ？」

「……信じたいんです。こんな自分を……アサシンとしての俺を助けてくれる人たちのことを」

「えっ？」

その答えに楯無は一瞬呆然としてしまう。それはカムイの心の声だった。ある日突然アサシンとしての資質に目覚め、自分の世界がガラリと変わってしまった。

他人にできないことが出来るようになり、それを気味悪がったまわりの人間は彼に敵意を持った。まだ幼い彼がその状況に耐えられたのは、そんな自分を自分と認めてくれた家族や親友、そしてその姉たちだけだった。だからこそ彼は、自分を認めてくれる人間を切り捨てるなどできなかった。敵でないならなおさらだ。

そんな彼の心情を悟ったかのように楯無は彼を見つめる。そして何かを思いついたか、笑みを浮かべるとおもむろに自分の左手を彼に差し出した。

「とりあえず信頼の証ってことをお願いしていいかしら？」

「俺はまだ信頼しきれないですけどね……」

「あらら、手厳しいのね。でもあなたを信頼したいのはこちらも同じよ」

「ふっ……、違くない」

正直カムイは彼女に苦手意識を持っていた。始めて廊下で出会った時はおどけていたのに、ここでははこうして真剣な顔をして向き合っている。

気がつけば警戒心が解かれ、仲間になってもいいところまで来ている。まるで彼女の手のひらで踊っているかのような感覚がした。

そのことに不快感を覚えつつ、カムイはまた彼女に同情していた。彼女もまだ成人していないのにも関わらず、当主という大役をこなしている。

そして仕事をこなすためにいくつもの顔を使い分けなければならない。どれが彼女の本当の顔か分からないが、先ほどのやり取りで何か通じ合うものを得たのも確かだ。

(ならば信じてみるか……、根拠がないのが悔しいけどな)

カムイも楯無に対して自嘲気味に微笑むと、楯無の手に自分の手を重ねる。

こうして二人はがっちりと握手をしたのだった。お互いが助け合っ  
ていけることを願いながら……

握手が済み、それが終わると同時に入室してきた布仏虚の入れなおした紅茶を飲みながら、カムイは楯無と情報交換を始めた。

カムイは自分が”エデンの果実”を所持していない事を語り、楯無はこれまで更識家が得てきた情報を提供することを約束した。

楯無はカムイが”エデンの果実”を持っていない事を聞き、安心と落胆が混じったような複雑な表情をしていた。

それからは虚を交えた三人で雑談をする流れになったのだが、その時の楯無はおどけた笑みを浮かべ、時々冗談を言ってくるようになったので、カムイが不安になってきたのは余談である。

「しかし会長さんより布仏さんの方がよっぽど信頼できそうですよ。紅茶もおいしいし……」

「恐れ入ります。まあ会長は悪ふざけするのが生きがいみたいな人ですから……」

「ちよつと、二人ともひどいわよ。この容姿端麗文部両道、おまけにISロシア代表の私に何か問題があるとも？」

「ありまくりです」

楯無の問いかけに他の二人は同様の反応をする。カムイは楯無の相手をするのは苦手だが、虚とは不思議と馬が合い、先ほどのようなやり取りが続いている。

楯無はセンスで口元を押さえてヨヨヨと泣き崩れているが、それがふざけていると分かっている二人はそれを無視し、紅茶を啜る。

そのおざなりな対応に、楯無は割と本気で落ち込んでいたのだが、何かを思いついたのか目をキラんと輝かせる。

「そういえばカムイ君。あなた一週間後にイギリス代表候補生とやりあうんでしょ？」

「ん、情報が早いですね。流石俺をストーキングしてただけのこととはある」

「がび〜ん!?　いくら何でもその言い草はないわよ。一応あなたの先輩よ？」

「布仏さん、紅茶のおかわりお願いします」  
「そして無視!？」

まともに取り合うだけ無駄と学習したカムイは楯無をスルーする。だからいつの間にか自分が名前で呼ばれていても気にしないことにした。

自分のペースに引き込めないことに更に落ち込んだ楯無だが、まだ諦めていないのかカムイに質問を投げかける。

「でも残り一週間ですごいかなる相手とは思えないわね。ここは誰かにコーチを頼むしかないでしょうね」

「でしょうね……、誰か適任はいないものでしょうか？」

「それならあなたの目の前にいるでしょ？　先輩らしいところを見せてあげるわ」

そう言いながら勝ち誇った顔をして自分を指差す楯無。確かにロシア代表の彼女ならば適任だろう。

「いや、俺は千冬さんに頼もうとしていたんですが……」

「ええ〜、親睦を深める意味でも私に教える乞うのが一番だと思うけどな。それに織斑先生よりあなたのことを知ってるわ」

「そ、それはそうかもしれないが……」

いつの間にかカムイの隣に座った楯無がカムイの耳元でそうささやく。それと同時に漂ってくる楯無の甘い香りにカムイも若干動揺する。

しかもその時に楯無の胸が腕に当たっており、わざとと分かっているにもかかわらず。楯無はカムイの様子にしてやったりとほくそ笑むと、話を先に進める。

「でしょ？ 私にまかせてくれれば訓練機でも勝てるようにしてあげられるわ。今のあなたには申し分ないと思うけど？」

「確かに……。オルコット相手に無様な戦いをしたくない」

「なら決まりね。返事はハイかYes、あとはワンでもいいわよ」

無邪気な笑みを浮かべつつそう宣言する楯無に、カムイは頭を抱える。どう考えても自分がイジられるのが分かりきっているからだ。だが千冬は忙しそうにしているため個人の用事を頼むのは憚られるし、アサシンの事を知っている彼女に教えてもらったほうが効率がいいのは目に見えて明らかだ。

それにこれは未だに考えの読めない楯無を知るいい機会ではないのか？

楯無のことを知るためには止む無し……

カムイとしてはなるべく彼女にもて遊ばれるような真似は避けたいのだが、背に腹は変えられない。

「虚、今からアリーナと訓練機は手配できるかしら？」

「どうせ会長のことだろうと思ひまして抑えておきました。場所は

第三アリーナ、ISはラファール・リヴァイヴを使用してください」  
「流石は虚ね。頼りになる」

どうやら準備は万端らしい。完全に楯無のペースに飲み込まれていることに若干苛立ちを覚えるが、強くなるために贅沢は言っていない。

だからカムイは決意する。この場は楯無を信用し、来るべき戦いに向けて己を鍛え上げる事を……

「……では会長さん。あなたに俺の命運を預けます。よろしく願います」

「うん、まかされました。素直なのはいいことね。じゃあ早速行きましよ」

そういつと楯無は自分の腕をカムイの腕に絡めるようにして、彼を立たせると無理やり立たせるとアリーナに向かって歩き出す。

カムイは突然の彼女の行動にもはや驚くことも無く、呆れた顔をしてされるがままになっていた。

虚はそんな二人を若干笑みが入った顔で送り出す。

かたや笑みを浮かべて状況を楽しんでいる更識家当主、こなた状況についていけず戸惑い続けるアサシン。

そこには先ほどの険悪さは感じられず、互いを仲間として認識しているかのような安らかな雰囲気が漂っているのであった……

## 第五話 裏側での駆け引き（後書き）

今回は内容的にどうなんだろう？ 感想をくださった際の答えとしては説明不足かもしれないませんが、後々理由は判明します。多分……

## 第六話 過去から続く想い（前書き）

モッピー知ってるよ。今回の話では色々ヤっちゃったって事。

## 第六話 過去から続く想い

IS学園学生寮。校舎にひけを取らない規模の建物であり、IS学園の生徒達はみなここで生活している。基本的には相部屋であり、二人で一部屋を使用する。

その高級ホテル並みの豪勢さと、利便さを追求した部屋のうちのひとつでは、ある女子生徒がシャワーを浴びながら考え事をしていった。

15歳という年齢でありながら抜群のボディスタイルを持っており、引き締まった体は女性特有の柔らかさも兼ね備えている。

そして人によっては、“エデンの果実”よりも手に取りたいであろう、二つの豊満な果実が胸に実っている。

そんな同性や異性の人間が注目するような美貌を持った彼女が考えていたのは、彼女にとってかけがえの無いある男の存在である。

（思えば初めて会ったときからは、ここまでの想いを抱くなど考えられなかったな……）

シャワーから出るお湯の温もりを感じながら篠ノ之箒は思い出していた。カムイとの出会いの事を……

彼女が初めてカムイと出会ったのは、小学1年生のときだった。

当時から箒は剣道を嗜んでおり、更に凛々しい顔立ちからか、まわりの女子と比べて目立っていた。そのため男らしい外見や言葉遣いによって、同級生の男子からからかわれることも多かった。

別段箒はそのこと自体は気にも留めてなかったし、相手にするのにも馬鹿馬鹿しいと思っていた。

だがあの時は違った。箒がそうじをしている時に現れた、いつも彼女をいじめている男子数名が、髪を結わえていたリボンを強引に奪ってしまったのだ。

別に男女と罵られても、可愛げが無いなど言われてもかまわなかったが、自分のリボンに手を出された事は彼女にとって耐え難い屈辱だった。

(あれは昔も今も姉さんと私をつなぐ唯一のものだったからな。)

そのリボンは箒が慕っていた姉がプレゼントしてくれた大事な物だったのだ。箒にとってのそれはただのプレゼントという以上に、引きこもって何かをしていることの多い姉とのつながりが感じられる、数少ない代物だったのだ。

それをくだらない虐めのために奪われた箒は、目の前にいる男子達を激しく憎んだ。そしてもう自分に関わってほしくないと思った。そのためにはどうしたらいいだろうか？ 箒が考え付いたのは、彼らを痛めつけることによって自分への恐怖を植えつけるという、暴力にまかせた解決法だった。

自分の手には武器になりそうなほうきが握られているし、あいつらが剣道をやっている自分に負けるはずが無い……

そう考えた箒は後のことも考えず、男子達に殺気をこめた視線を送る。彼女の放つ雰囲気を始めは萎縮していた男子たちだが、やがて一斉に殴りかかろうと彼女を取り囲む。

そしてけんかという名の暴力が始まろうとしたその時、カムイが現れたのだった。

(初めて会ったあいつは、一目見て私たちと同世代ぐらいだろうとは分かった。だが……)

フードを目深にかぶり、見るもの全てに恐怖をあたえそうなプレッシャーを放ちながら、突然箒の前に彼女のリボンを差し出す。

驚いたのは箒だけではなく、いじめっ子の男子達も同じだ。何故なら彼は一瞬のうちにリボンをスリ取り、彼女の前に移動したのだから……

その間誰もカムイの存在に存在に気付かなかったこともあり、不気味に感じたいじめっ子達は、口より先に手を出すことで彼を排除しようとする。

彼は落ち着き払った様子で男子達の攻撃をかわしていき、驚くべきことに一度も反撃しなかった。

そして一連の様子を見ていた友人が乱入すると、いじめっ子達は捨て台詞を吐いて逃亡したのだった。

結果から言えば誰も傷つくことなく箒のリボンも無事だったのだから、良い結末だったといえるだろう。

だが箒はそれに納得がいかなかった。自分の行動が遮られて不甲斐なかったという事もあるが、不満に思ったのは何故彼が反撃しなかったかということだ。

始めに手を出したのは向こうの方だし、状況的に見てこちらに非はないはずだ。むしろ反撃に転じて屈服させたほうが、今後のためになるのではないだろうか？

見たところ彼の体さばきは、素人が見ても熟練された（同年代な）におかしいとは感じたが、ものだと分かったし、かわすだけでなく攻めに転じたこともできたはずだ。

そのことを詰問した彼女は、カムイの表情を見て絶句することになる。

何故なら彼は悲しそうな、自分を責めるような顔をしていたからだ。

箒には訳が分からなかった。彼は何も悪い事はしていないし、むしろけんかに勝ったことは喜ばしいことではないのか？

リボンをわたして立ち去っていったカムイの背を見つめながら、  
箒は考える。だがまだ小学生になりたての彼女には、彼の表情の意  
味が理解できなかった。

（それからだったか？ 私があいつに付きまとうようになったのは  
……）

答えが出せなかった箒は、カムイに付きまとうようになっていた。  
彼のことを少しでも多く知ろうとしたからだ。

始めのうちは尾行しても見失うことが多かったのだが、時が経つ  
につれて、だんだん関わる機会も増えてきた。

それは同じくカムイに興味を持っていた織斑一夏と友達になった  
からということもあるし、カムイが心を開いてくれたからというこ  
ともある。

そしてそれらの行為は、結果として彼女の内面に変化を及ぼした。  
カムイとの様々な会話や経験を通じて、自分を客観的に見ることが  
できたからこそ、ある日理由も告げずに突然失踪した姉を今でも信  
じられているし、培ってきた力に溺れることなく自分を守っていく  
ことが出来た。

（……そうだ。だからこそ今度はカムイの力に、隣に立っていたい  
と思っただ。）

いつしか自分を助けてくれ、見守ってくれたカムイに友情以上  
の感情を抱くようになったのは、彼と離れ離れになってからだ。

その時になって初めて、彼という存在が自分にとってかけがえないものへとなっているか認識できたのだ。

だからこそ今度会ったときは、自分が彼を助け、守っていきたいと誓った。そして互いが結ばれるような関係になりたいと想った……

幸いなことに現在カムイと付き合い合っている女性がいないことも判明しているし、これならば六年の空白も簡単に埋められてるだろう。

(それに私の事もちゃんと女性として見てくれているしな……)

篝はカムイが彼女の容姿を照れながらもほめていた時の表情を思い出し、自然と笑みを浮かべる。こみあげてくるうれしさを隠すことなど、今の篝にはできそうもない。

自分を意識してくれているのなら、カムイが自分の想いに答えてくれる可能性は十二分にあるだろう。だがこれからの学園生活によつては、カムイが他人に狙われることもあるだろう。

特にセシリア・オルコットは男としてのカムイに好意を抱いている節があるし、それ以外の女子もこれからなびいていくかもしれない。

(だが誰にも渡すものか……。カムイの隣に立つのはこの私だ)

篤は決意する。正々堂々まっすぐな方法でカムイに想いを伝え、この先の人生を二人で歩いていくことを……

だが篤はまだ知らない。彼女よりも先にカムイへの想いを伝え、彼のパートナーとなろうとしている少女がすでにいるということを知り……

心身ともにほてった体にバスタオルを巻いて浴室から出ると、不意に自室のドアが開かれた。おそらく誰かが入ってきたのだろう。おそらく自分の同室の相手だろうと篤は判断した。放課後すぐにあてがわれた自室に向かったのだが、一向に同居人がやってくる様子は無かった。

そのため一夏を誘って剣道場にて汗を流していたのだ。本当ならカムイも誘いたところだったのだが、どこかに行ってしまったらしい。

そして剣道場から戻ってきて相手が入室した痕跡がなかったため、先にシャワーを使わせてもらっていたのだ。

そのまだ見ぬ相手に申し訳ないと思いつつ、篤は出迎えるためにドアの前へと向かっていく。

「同室のものか？先にシャワーを使っちゃってすまない。私の名前は篠ノ之……ふえ！？」

箒はドアの前に立っていた人物を見て驚愕することになる。  
何故なら、それが自分が先ほどまで考えていた四条カムイだった  
のだから……

だがカムイの様子はおかしかった。服装が男性用ISスーツだったのだが、その視点は箒のほうを向いているようで向いておらず、どこか別のところを見ているようだった。

そして今の箒の姿を見ても恥ずかしがるどころか、どこか嬉しそうな顔をして箒に近づいていった。その顔にいやらしさは感じられず、むしろずっと引き離されていた恋人と  
久々に会えたかのようなやわらかい表情をしていた。

箒もそんな彼に違和感を覚えたが、羞恥心により頭が混乱しており思考が追いついていない。

「カ、カ、カ、カムイっ!? お前一体何しにっ!? ……………き  
や!?!」

そして箒が呆然としている間にカムイは彼女に近づき、なんと彼女を抱きしめてしまったのだ。どうということなの……

(な、何だこれは!? カムイは何を考えている!? えっ? 私  
のあごに手を添えたぞ。これはまさか……)

箒はあまりの出来事に理解が追いついていない。これから起こりうることに体は抵抗しようとしたが、心ではありのままを受け入れようとしている。

そうしてる間にもカムイの顔は目前に迫ってくる。しかし箒は頬を赤らめ、潤んだ瞳でそれを見つめることしかできない。そして二人の唇が触れるまさにその瞬間……

カムイは糸の切れたマリオネットのように床に崩れ落ちるのだった。

「本当にすまなかった!!! この通りだ!!」

「だから私は気にしていないと言っただろう! むしろあれは……ええい、いいから顔を上げろ!」

箒の同室相手であるカムイが目覚めてからずっと土下座を繰り返しながら、部屋着に着替えた箒が顔を赤らめながらそれを止めるといふ珍事が繰り返られていた。

カムイの説明によると、生徒会長にISの練習でしごかれ、その時の疲労で意識が朦朧としながらも部屋へ戻っていたらしい。

箒は色々と指摘したいことがあったのだが、カムイのあちこちにあざや打撲のあとがあったことから彼を信じ、追及はしないでおい

しかも肝心の自分に抱きついた理由については口を濁し、幻覚を見ていたと言い出す始末で、しまいにはアツカが、だとかマリアが、だとか訳の分からないことをつぶやきだしたため、聞くのをあきらめた。

これらのことから篤は、カムイをとにかく休ませたほうがいいだろうと判断した。だがそんなことで彼女の気持ちはおさまらない。

先ほどのやり取りで彼女の心は昂っており、積年の想いが噴出しそうになっていた。それにカムイの口から、生徒会長という単語が出てきたのも気になる。

篤も入学式に出ていたので生徒会長の美貌は把握していた。その生徒会長がカムイを狙っているのなら、早急に対処せねばならない。

だから篤は攻勢に出ることにした。何事においてもつねに相手の先を読み、先制攻撃する。それは勝負においても恋愛においても重要な要素なのだ。

「……悪いと思っているのなら質問に答えろ」

「な、何だ？ それで許してもらえるのなら何でもするぞ」

篤の突然の問いかけに、カムイは動揺しつつも真剣な顔つきで彼女の方を向く。彼女には無意識とはいえ、失礼な振る舞いをしたことに深く反省しているからだ。

だがその篤の顔が今何故かカムイの目の前にあつた。頬を赤らめながら見つめてくる彼女に、カムイの顔もまた羞恥に染まっていく。

「私を抱きしめてみてどうだった……？ 嬉しかったか？ 興奮したか？」

「箒？ お前は何を……」

「私はお前にずっと言いたいことがあったんだ……。聞いてくれ、私はお前のことを……」

箒は瞳を潤ませ、カムイの耳元でささやくように話はじめた。今の箒の纏う雰囲気は、男を魅了する妖美さに満ち溢れ、流石のカムイも魅了されてしまっていた。

そして箒はカムイの正面に顔を向けると、一世一代の大勝負に出ようとする。この状況、しかもカムイが自分を過剰に意識している今ならば成し遂げられる。

箒が続きの言葉を紡ごうとして……



今のカムイにできたのは、十字を切って一夏の冥福を祈ることだけだった。

「うるさいぞ貴様ら!!! 入学初日から私の手を煩わせるなどい度胸だな……そんなに体がなまっているのなら私が相手をしてやる!!!」

突然、どこからか寮長である千冬の声が響き渡る。竹刀を握りながら箒たちを追いかけていく様子に、寮内は物々しい雰囲気にかまれていった。

その後、一夏、箒、千冬による不毛な追いかっこは約二時間にわたって行われ、二人に追いついた千冬による筆舌し難い制裁によって幕を閉じたのだった……

箒の勇気ある行動は不発に終わり、カムイに想いを伝えるまでには至らなかった……。だが一夏が箒たちの部屋に乱入してから様子は、他の女子生徒たちに筒抜けであり、カムイと箒は男と女の関係であるという噂が広がったため、結果的にはある程度報われたことをここに記しておく。

## 第六話 過去から続く想い（後書き）

どうしてこうなっちゃったのかワカンナイ（・x・）

お気づきの方もいらっしやると思いますが、篝ちゃんの設定に原作との差異がいくつかあります。

途中からノリとイキオイで書いてしまったのですが、一応伏線をはったつもりです……。

次回はいよいよバトルシーンに突入していきます。読んでいただければ幸いです。

第七話 1対1対1 信念をかけた戦い 前編(前書き)

お待たせしました。今回の話は書くのに時間がかかってしまいました……。

## 第七話 1対1対1 信念をかけた戦い 前編

入学式から一週間後の放課後。いつもなら散漫としているこの場所が、今や生徒や外部のIS関係者などで埋め尽くされているのは一つの理由がある。

セシリア・オルコット、四条カムイ、織斑一夏の三名による決闘のためだ。

これは元々1年1組のクラス代表を決める戦いだっただけなのにだが、人伝で話が外部にまで広がってしまった。

しかもISに乗れる男を一目見ようという外部の人間の目論見も重なり、学園の生徒会や委員会がアリーナの監視に駆り出される始末である。

だがこのクラス代表決定戦が注目されている理由はこれだけではない。

もう一つの理由……それは専用機が存在である。

ISにおける専用機は、本来ならば実力や特殊な技能を持つ操縦者などに与えられる物だ。つまり誰でも手にできるようなものではなく、それ相応の資質が求められることになる。

一流のIS操縦者を目指す者の中には、自分の専用機を持つことに憧れを感じるものは少なくない。故に専用機を持つセシリアが試合に出るとなれば、自然と注目されるのは目に見えて明らかである。

ところが、この試合において注目されているのはセシリアのブルー・ティアーズだけではない。

一人目の男性操縦者・織斑一夏の専用IS……白式である。

白式はIS学園が用意した一夏のためだけの専用機である。本来ならば専用機は、どこかしらの国家・企業・団体に属していなければ扱うことさえできないものである。

しかし今回のそれは貴重な男性操縦者のデータ収集の目的のため、特例の中の特例により製造されたのである。

そのためIS学園外部から来た人間の一部は、操縦者達よりもむしろ白式のほうに注目していた。

何故ならば、国際情勢がISによって決まるといっても過言では無い今の世界において、ISに使われている技術の収集は大変重要なものだからだ。他のISの状況を把握し、他より優れたISを製造することができれば、それだけ自分達の利益につながることになる。新たな専用機が製造されたとなれば、そのデータをいち早く収集しようと思ふ人たちが集まってくるのも当然と言える。

何はともあれ、この専用機が存在によって織斑一夏だけは、セシリア・オルコットに対抗しうる手段を手に入れたことになる。

つまり当初はセシリアの圧勝と思われたこの試合が、白式の登場によってどう転ぶか分からなくなったということである。ISを動かしてから一週間に満たない人間が勝てるとすれば、それこそ専用機でもって対抗するしかないからだ。

しかも今回は競技用の基本ルールに加え、1組のクラス担任である織斑千冬により、特別ルールが加えられていた。

1対1対1……、つまり三人によるバトルロワイヤル方式により試合を行い、それに勝ち残った者だけが勝者となる。単純に考えれば、実力のないものや専用機持ち以外が、最終的に勝者となり得る確率は限りなく0に近いということになる。

よって今回の試合を制するのは専用機を持つセシリアか一夏であろうと誰もが考えていた。

少なくともこの時点では、専用機を持たぬ二人目の操縦者・四条カムイのことなど、誰もおまけ程度にしか考えていなかったのだ……

（だがそんなことは関係ない……。俺は、俺にできることをするまでだ）

第三アリーナのピットで自分の使うラファール・リヴァイヴを展開していたカムイは、今回の対決に向けて最後の調整をしていた。

武装の展開、スラスター出力の調整、マニピュレーター稼働の確認……、楯無との特訓の合間に得たISの知識を総動員し、カムイは最高の状態で試合に臨もうとしていた。

いかに自分に不利な状況であろうとも、勝てる可能性がある限り勝負を捨てるつもりは毛頭なかった。

そう思えるようになったのは、楯無との特訓の成果だけではなかった。

（試合に勝ったら、あの眼鏡をかけた子にもお礼を言わなければな

……)

自分が使用するラファールを整備している最中に会った少女が教えてくれた、ISの能力を最大限に引き出す整備方法……。

それにより、専用機までとはいかずとも、ISのコンディションは当初よりも比較的高まった。

たまたま通りすがっただけの彼女が、何故カムイを助ける気になったのか？ この時点でのカムイには分からなかった。

ただ一つだけ言えるのは、この試合が決してカムイだけのものではないということだ。

ISの特訓をしてくれた楯無、整備を手伝ってくれた彼女、そして特訓をともに乗り越え、試合に臨もうとしているラファール……彼を支えてくれた彼女達の気持ちに応えるためにも、無様な試合だけはするわけにはいかなかった。

(頼むぞラファール……。俺は二人やお前の助けに応えるためにも、負けるわけにはいかないんだ)

カムイが労わるように撫でていたラファールのコアが、彼の信頼に応えるかのように鈍く輝く。

「調子はどうだカムイ？ 戦いを前に怖気づいているのではないだろうな？」

カムイが感慨にふけっていると、いつの間にか篝がピットに入ってきていた。口ぶりからしてカムイの様子を見に来たのだろう。

「箒か……？ むしろこれからの戦いが待ち遠しいくらいだ。そういえば一夏の様子はとうだった？」

「ああ、何だか慌しかったな。専用機がどうとかいつていたが……くわしくは分からなかったな」

「そうか……、緊張してなければいいんだが……」

カムイの答えに、箒は嬉しそうにしつつ一夏の様子を伝える。カムイとしては、これから戦うことになる親友の状態が気にかかったのだが、どのようなことになるうとも、真剣勝負である以上手を抜くつもりは毛頭なかった。

聞くところによると、一夏はこの一週間でまるまる箒との剣道の練習で費やしてしまい、ISの練習ができていない状態だという。

（二人とも熱が入りすぎてしまったらしい）

だがカムイの使うラファールよりも性能のいい白式を使用する以上カムイの特訓における経験がスペックの差により相殺される可能性もある。

その点は、カムイとてきちんと把握している。だからこそ勝つために、全身全霊をかけてぶつけなければならぬのだ。

「一夏のことより自分の心配をしたらどうだ？ ただでさえ不利な状況なんだ。気を抜くと一瞬で落されるぞ」

「分かっている。そのために会長の下で特訓してきたんだからな」

「……その会長の特訓とやらが役に立てばいいのだがな」

箒もカムイと同様のことを懸念していたのか、忠告するような厳しい視線を向ける。特に楯無の話を出した際に箒の表情は強張っていたが、それは無理もないことだった。

何故なら特訓を終えたカムイには、日に日にあざや打撲などの怪我の跡が増えていったからだ。そのことは部屋に帰るたびにカムイ

の治療をした筈しか知らない。

だからこそ筈は心配していた。傷つきながらも頑張ってきたカムイが何も出来ずに負けてしまうのではないかと……。そんな光景を筈は見たくもないし、信じたくもなかった。

「心配するな筈、俺は強くなった。……だから信じてくれないか？」  
「カムイ……」

そんな筈を安心させようと、カムイは言葉を紡ぎだす。今回の試合でかならず勝てるという確証は無い。だがその言葉や表情には、筈を納得させるような力が籠っていた。

その言葉を聞いて、筈は思わず表情を緩めた。根拠は無いが、筈には何故かカムイの言うことが素直に信じられた。

二人は互いの顔を見つめあう。かすかだが、そこには互いの信頼を確かめ合うような笑みがうかんでいた。

だがこの安らかな雰囲気の中で近づいてくる不穏な影があった。その人物はこの光景を見ると、まるで新しいおもちゃを見つけたかのような無邪気な笑みを浮かべた。

「あらら？ とんでもないところに出くわしちゃったわ。甘いひと時のお邪魔しちゃったかしら？」

「だ、誰だ!？」

「その声は会長か？ いつからそこに？」

「いつからって……、心配するなってカムイ君が語りかけてるところからかな？ あゝあ、私もあんな顔で愛をささやかれたいなあゝ」

先ほどの静寂をぶち壊すかのように、影の正体・更識楯無が唐突に話しかけてきた。しかし突然の第三者の登場に箒は驚き、顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

カムイは楯無の相変わらずの悪ふざけに、呆れたようにため息を吐く。初めは彼女の人をおちよくなるような行動には憤りを感じていたのだが、今ではどうでも良くなっていた。

「ところで何か用ですか？ そろそろフィールドに出ようと思ってたんですが」

「うゝん、強いて言うならかわいい弟子にいつてらっしやいのキスをしてあげようと思ったんだけど……」

淡々と問うカムイに対して、何故か箒に挑発するような視線を向けて答える楯無。その口元には笑みが浮かんでいる。おそらく今回の標的は箒なのであろう。

案の定、楯無の言葉を聞いた箒は、不潔だの不謹慎だなどとブツブツつぶやきながら、怒りと羞恥が入り混じったような顔で楯無をにらみつけていた。

「失礼ですが、生徒会長としての立場をわきまえたらどうですか？ カムイが動揺してします」

「あら、おあいにくさま。彼と私はすでに特別な関係だから、心配されるような事は何もないわよ。篠ノ之束博士の妹さん」

「……私は篠ノ之箒だ。その呼び方は次からやめてください」

楯無の挑発的な態度に、箒は敵意の籠った視線で楯無を見つめる。その二人の視線の間には火花が散っているようにも見えた。

楯無の言っている事もあながち間違いではないのだが、事情を知らない他人が聞けば間違いなく誤解する人間も出てくるだろう。カムイと楯無との間に恋愛感情などはなく、あるのは世界の安全と平和を守るという使命だけなのだ。

だが二人が箒に対してそんなことを言えるはずもない。

カムイは楯無を非難するような視線を向けるが、ウィンクを返されるだけだ。それを見た箒が更に不機嫌になる。

流石にやりすぎだと感じたカムイが楯無を諫めようとする、それより先に楯無の口が開いた。

「おほん。まあ冗談はさておき……カムイ君、今まで君に特訓をつけてきたわけだけど、最後にこれだけは言うておくわ」

(場の空気を乱しておいてこれか……)

真剣な顔をして語りだす彼女に、カムイは心の中でそう思いつつ次の言葉を待つ。

「この試合……あなたは勝てるわ。私はあなたの力を信じてる」

見るものを元気にするような笑みを浮かべ、ただ一言だけ楯無が発したその言葉……。その言葉の聞いたカムイは、胸のつかえが取れたような感覚がした。

一週間もの間、無茶な特訓を積み上げてきたが、その内容自体はよく練られていたし、着実に成果が身についていった事はカムイ自身が良い分かっていった。

そして何より特訓中はアサシンとその協力者ではなく、先輩と後輩の関係として接してくれていた。

その特訓の中で、楯無は叱咤激励しながら本気でカムイに接していた。そのことをカムイは感謝していたし、敬服していた。

だからこそ彼女の今の言葉は、カムイにとって非常に心強いものであった。

「それに……君の事を心配してくれている幼馴染にもいい顔見せないと駄目なんだからね」

「ふえ！？ べ、別に私はカムイの事など……」

「も、素直じゃないんだから」

楯無の発言に、今度は箒が顔を真っ赤にして盛大にあわてだす。

楯無はフォローのつもりで言ったらしいが、箒は恥ずかしさからか顔を背けてしまった。

やはり会長はズルい。二人の様子を見ながらカムイはそう考えていた。いつも楯無は場を乱しつつも最後はキレイに纏めてしまう。

やり込まれたかのような不快感は残るのだが、結局は良い方向に納まる。カムイは今でもそんな彼女に苦手意識を持っているが、その気配り自体には感謝していた。

どこか強張っていた心が解きほぐされているのを感じて、カムイ

は気持ちを新たにピット出口を見据える。戦いの時はすぐそこにまで迫っているのだ。

「二人とも……」

「な、何だ？」

「ん」

唐突のカムイの呼びかけに筭と楯無は彼の顔を見据える。それを見計らって彼はただ一言だけこう言った……

「行ってくる！」

試合にかける決意が籠った言葉を聞いてキョトンとする二人だったが、やがて彼を送り出すべく声をかける。

「カムイ！ 私もお前を信じてる。負けたら承知しないからな」

「そうね、何たってこの私が教えたんですもの！ 絶対に勝ちなさい」

カムイを信じる二人に見送られながら、カムイはカタパルトによって戦いの場へと向かうのであった。その顔にはかすかに笑みを浮かべて……

第三アリーナバトルフィールド……。観客席のはちきれんばかり

の歓声とは裏腹に、この場所は静寂に包まれていた。

嵐の前の静けさ……、その表現がしつくりとくるような状況だ。カムイは目を閉じてじっとしており、セシリアはそんな彼を見据えている。

だが二人の間に言葉はなくとも、これから己の信念をかけて戦うという意思、闘争本能が感じられる。そしてそれは遅れてきた一夏とて例外ではなかった。

カムイとセシリアと同じように、彼にも守るべき誓いがあるのだから……

実を言うと、当初の一夏は自分が専用機を持つことに納得できていなかった。何故ならそれが与えられた理由が、ブリュンヒルデである織斑千冬の弟であるということと、男のIS操縦者というだけであり、自分自身が認められたわけではないからだ。だから彼は専用機を持つのなら、自分より強いカムイの方がいいと感じていた。

だが当のカムイはそれを否定した。入学直前でISに乗れることが発覚したISランクCごときの自分が専用機などおこがましいと考えていたからだ。

一夏はその時のカムイの顔を覚えている。その顔には悔しさや、一夏への妬みなどといった負の感情が一切感じられなかったからだ。

セシリアに勝つためには白式の力が必要と分かっているとしても、カムイに対する申し訳なさなどから試合直前まで悩んでしまっていた。本当に専用機を使っているのかと……

だがその悩みは教師であり、実姉でもある千冬のある一言でふっとんでしまった。彼女は白式に乗るのをしる一夏に一言こう言ったのだ。

「悩んでいるくらいなら、専用機持ちに相応しい人間になれ！　そしてカムイや私たちの期待に応えて見せる！」

口調こそ乱暴だったが、一夏は姉の信頼の籠った言葉に励まされ、白式を纏って戦いに臨もうとしている。

（そうだ……。俺はみんなを守るために強くなる！　そのために負けるわけにはいかないんだ！）

一夏は決意も新たにスタート位置につき、カムイとセシリアを見据える。カムイは微動だにしなかったが、セシリアは一夏を見てあなどるような笑みを浮かべる。

「あら、結局来ましたのね。口だけではなかったということですか」「当たり前だ。俺は逃げも隠れもしないぜ」

「そうですか……。手加減してさしあげてもよろしいのですが、流石に二人がかりでは油断できませんわ。せいぜい派手に散りなさい」

セシリアの挑発を真正面から跳ね除けつつ、一夏はカムイのほうを見る。セシリアの発言の際に若干まゆをひそめたように見えたが、いまだに目をつむっている。

このようなやり取りの間にも試合の開始時間は刻々と近づき、すでに秒読み段階に入っている。

一夏はどうすればセシリアやカムイに勝てるかを考えていた。セシリアは自分とカムイが組んで戦うと考えているようだが、それに

は同感だった。

専用機持ちになったとはいえ経験が不足している自分や、戦闘経験はあるが専用機をもっていないカムイだけで、代表候補生であるセシリアに勝つのは限りなく可能性が低い。

それならば二人で互いを補い合ってセシリアを先に倒し、その後に決着をつける。自分かカムイが勝つにはそれしかないと考えていたからだ。

おそらくカムイも同じ事を考えているだろうと一夏は確信していた。カムイは確実に勝ちを狙いにいくということは、長年の付き合いから分かっている。

( 5 …… 4 …… )

あと数秒で試合が始まる……。これからどうなるかは分からない。だが最悪セシリアだけは倒す。一夏が戦うべき相手を見据え、気合を入れていたその時……

>> …… お前達に先に言っておくことがある <<

突然カムイからの通信が入る。思わずカムイのほうに意識が向く。

( 3 …… 2 …… )

>>1対1対1……、この戦いにおいて男か女か、ましてや友情なんてものは関係ない。なぜなら……<<

カムイはセシリアと一夏のほうに手を突き出す。まるで暗殺者が腕に仕込んだブレードで人を突き刺すかのように……

(1……)

>>最後に立っていた者が勝者だからだ<<

(試合開始!!!!)

試合が始まると同時にカムイの手が一瞬光る。カムイの目はまるで獲物を刈る猛禽類のごとく、獰猛かつ冷徹な色を帯びていた。

ズドオオオン……

空気を切り裂くかのように鳴り響く銃声。いつの間にかカムの両手には二丁のスナイパーライフルが握られていた。

試合開始から一瞬のうちに、セシリアのブルー・ティアーズと夏  
の白式は同時に狙撃されたのだった……

第七話 1対1対1 信念をかけた戦い 前編（後書き）

今回の話は心なしかチグハグしてたような気がする。もっと経験を  
つまなければ……。次回から本格的な戦闘に入っていきます。果た  
して勝利の栄光は誰の手に……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4504y/>

---

IS CREED

2011年11月27日04時01分発行